

かいろうあと 回廊跡

塔から東北へ約20m、講堂の東端から東へ約17mのところに東回廊を、講堂の西端から西へ約20mのところに西回廊の基壇をそれぞれ確認しました。幅4.0～4.6mの単廊と推定され、講堂の東西両辺の各中央に取り付けられています。基壇は南北の方向に立て並べた塼列と石列が走っており、両側の間には一段低い幅0.5～0.6mの犬走りがあります。



ひがしかいろうあと
東回廊跡 (東より)

だいとうがようあと 大当瓦窯跡

寺町から北西に約1.5km離れた和知町の大鳴と呼ばれる地区で、寺町廃寺と同類の布目瓦などが発見されたことから、寺町廃寺に瓦を供給した瓦窯跡ではないかと推定されていました。調査の結果、瓦窯にかかわる遺構が3ヶ所発見され、そのうちの1基は平窯であることを確認しました。



がようあとぜんけい
瓦窯跡全景 (平窯, 北西より)

みずき 水切り瓦

寺町廃寺跡の軒丸瓦は、素弁蓮華文や複弁蓮華文が出土していますが、そのいずれも瓦当面下端が三角状に突起しているいわゆる「水切り瓦」です。

この「水切り」がついている理由には、軒丸瓦はちょうど水の集まる部分に位置するため、その水を一ヶ所に集めて落とすためとか、瓦の飾りの文様の一種であるとか様々な説があります。



のきまる
軒丸瓦 (水切り瓦)

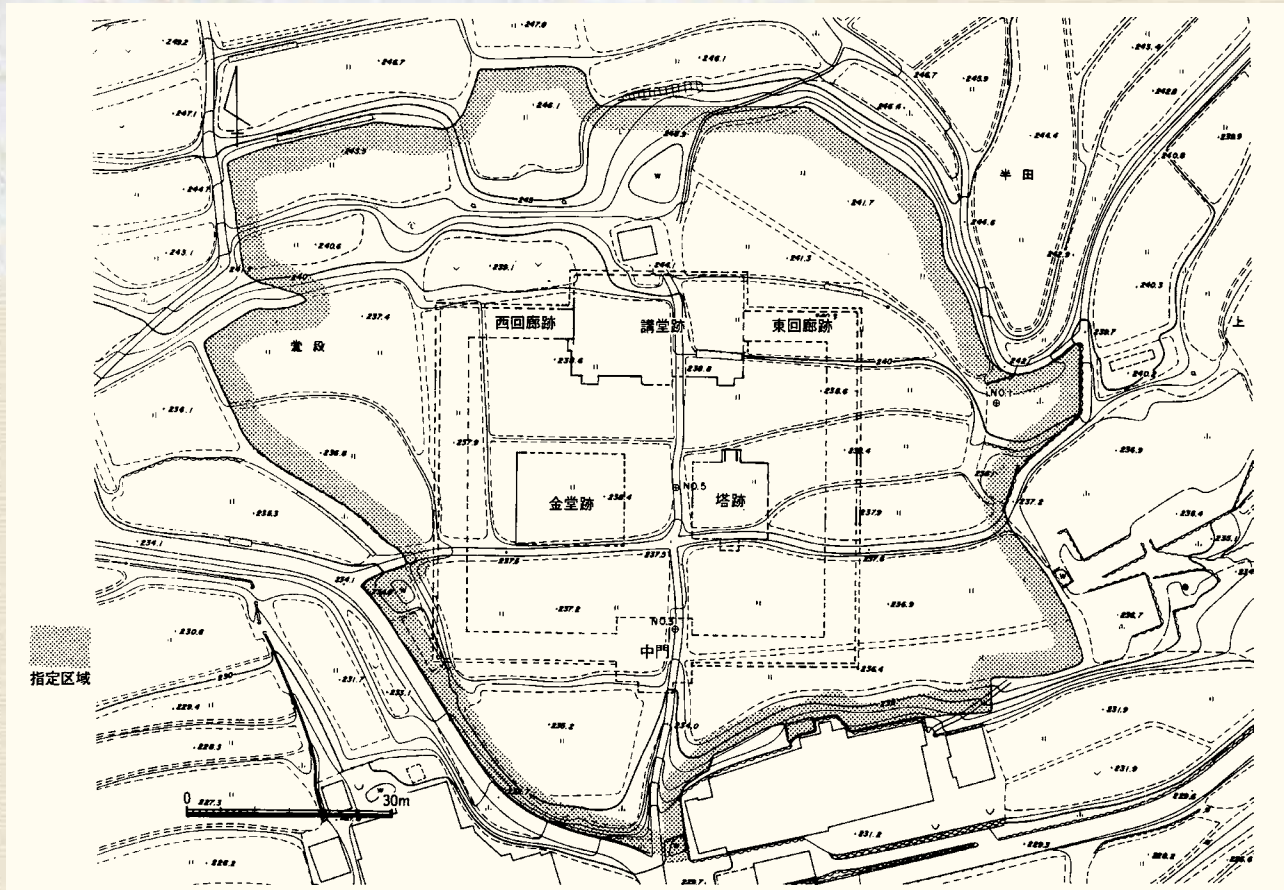
史跡 寺町廃寺跡

しせき てらまちはいじあと



復元模型 (広島県立歴史博物館 提供)

寺町廃寺跡は、飛鳥時代末期に建てられ、平安時代まで存在したと考えられる古代地方寺院で、平安時代前期に奈良薬師寺の僧侶景戒によって編集された我が国最古の仏教説話集「日本霊異記」に記されている三谷寺と推定されています。「日本霊異記」では、「かつて百済が乱れたとき、備後の国三谷郡の大領が、百済を救うため現地に派遣されることになったので、出征するに当たり、もし自分を無事に凱旋させてくださるならば、お寺を建て仏像を造ってお礼を申しましょと大願したところ、無事に凱旋することができましたので、弘濟禪師を伴って帰国し、三谷寺を建てました。」とあり、古代の地方寺院としては珍しく寺名と創建者を伺い知ることが出来ます。現在、寺院跡に行くと様々な石で積み上げられた塔のようなものがひっそりと立っています。なお、この遺跡の南西約1kmのところには、同じ古代地方寺院の上山手廃寺跡も発見されています。



寺町廃寺遺構配置図

寺町廃寺跡の調査は昭和54(1979)年から4年間実施しましたが、その結果、寺院の主要な建物である塔・金堂・講堂・回廊などの建物跡が発見され、また数多くの瓦や土器なども出土しています。このような伽藍配置は法起寺式と呼ばれています。

塔跡

塔心礎のある土台(塔基壇)は一辺が約11mの方形で、塔心礎の中央には、仏の骨を納めた舍利孔と考えられる直径約44cm、深さ21~22cmの円形状の孔があります。塔心礎の位置は、ほとんど当初の位置から動いていないものと思われます。基壇の北面には塔にいたる階段(幅2.9m×奥行き1.9m×高さ0.6m)が取り付けられていました。



塔基壇全景(北より)



塔基壇北辺(東より)



塔基壇北辺と瓦積み

金堂跡

現在塔心礎のあるところから西側へ約15m離れた水田の下約15cmのところに金堂跡が発見されました。金堂基壇の規模は推定で、東西約15.7m×13.4mで、現存の高さは0.8mです。基壇は東西両辺ともその外側に1~2段の塼を立て並べ基壇化粧をしています。また階段は南側で確認しました。



金堂基壇全景(北西より)



講堂西階段(南より)

講堂跡

講堂は塔・金堂の約10m後方(北側)中央に位置しています。基壇の規模は東西25.1m、南北14.7m、現高0.7mです。基壇は塔や金堂などと同じように塼で化粧し、その上に石を積んでいるいわゆる乱石積基壇と呼ばれるものです。基壇の前面(南側)には階段が東、中央、西の3箇所に取り付けられています。